慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	戦場の社会史 : ビルマ戦線と拉孟守備隊1944年6月-9月(後編)
Sub Title	The Japanese Garrison of Ramo : Japanese campaigns in Yunnan and Western Burma from June to September 1944 : part 2
Author	遠藤, 美幸(Endo, Miyuki)
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	2010
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.102, No.4 (2010. 1) ,p.767(133)- 786(152)
JaLC DOI	10.14991/001.20100101-0133
Abstract	拉孟全滅戦は, 1944年9月7日に終わってはいなかった。本稿(後編) では, 拉孟全滅戦を生き延びた将校, 兵隊, 慰安婦の異なる立場の人間の陣地脱出の軌跡と昆明捕虜収容所での生活の様子を一次史料から明らかにする。これは, 公刊戦史には全く記載されることのなかった拉孟全滅戦を生き延びた人たちのオーラル・ ヒストリーの記録である。 The annihilation of Ramo did not end on September 7th, 1944. This study (Part 2) illustrates from primary sources the circumstances surrounding people in different positions who survived the Ramo battle such as officers, soldiers, and comfort women; following their footsteps from escaping the battleground through their daily lives at the Kunming concentration camp. This record of the oral history of the survivors of the Ramo annihilation has not at all been described in Koukan Senshi.
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-20100101-0133

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

戦場の社会史―ビルマ戦線と拉孟守備隊 1944 年 6 月-9 月―(後編)

The Japanese Garrison of Ramo —Japanese Campaigns in Yunnan and Western Burma from June to September 1944 —Part 2

遠藤 美幸(Miyuki Endo)

拉孟全滅戦は, 1944 年 9 月 7 日に終わってはいなかった。本稿(後編）では，拉孟全滅戦を生き延びた将校，兵隊，慰安婦の異なる立場の人間の陣地脱出の軌跡と昆明捕虜収容所での生活の様子を一次史料から明らかにする。これは，公刊戦史には全く記載されることのなかった拉孟全滅戦を生き延びた人たちのオーラル・ヒストリーの記録である。

Abstract

The annihilation of Ramo did not end on September 7th, 1944. This study (Part 2) illustrates from primary sources the circumstances surrounding people in different positions who survived the Ramo battle such as officers, soldiers, and comfort women; following their footsteps from escaping the battleground through their daily lives at the Kunming concentration camp. This record of the oral history of the survivors of the Ramo annihilation has not at all been described in Koukan Senshi.

「三田学会雑誌」102 巻 4 号（2010 年 1 月）

戦場の社会史

——ビルマ戦線と拉孟（らもう）守備隊　1944 年 6 月–9 月——

（後編）

遠　藤　美　幸

（初稿受付 2009 年 12 月 9 日，
査読を経て掲載決定 2009 年 10 月 21 日）

要　　旨

拉孟全滅戦は，1944 年 9 月 7 日に終わってはいなかった。本稿（後編）では，拉孟全滅戦を生き延びた将校，兵隊，慰安婦の異なる立場の人間の陣地脱出の軌跡と昆明捕虜収容所での生活の様子を一次史料から明らかにする。これは，公刊戦史には全く記載されることのなかった拉孟全滅戦を生き延びた人たちのオーラル・ヒストリーの記録である。

キーワード

拉孟全滅戦，陣地脱出，慰安婦，捕虜収容所，捕虜尋問報告書，オーラル・ヒストリー

I. 拉孟守備隊の全滅

1944 年 9 月 7 日，中国雲南省の高黎貢山系の南端にある拉孟で，約 1300 名の日本軍の拉孟守備隊が全滅した。しかし，最後の陣地となった横股陣地の残存兵力約 80 名全員が戦死したのではなかった。陥落した日，拉孟陣地を脱出し生き延びた人たちがいた。脱出命令により陣地を 7 日払暁に脱出した木下昌巳中尉と伝令 2 名，捕虜となって連合軍に捕らわれた数名の将兵，そして拉孟の慰安婦たちであり，拉孟全滅戦闘は 9 月 7 日に終わってはいなかった。当時の日本軍では「生きて虜囚の辱めを受けず」という戦訓が罷り通っていたため，捕虜となって生き延びた将兵らは口を閉ざし収容所でも偽名を使い，所属を明らかにしなかった者も多かった。本稿（後編）では，将校，兵隊，慰安婦の異なる立場の人間の横股陣地脱出の軌跡と捕虜収容所での生活の様子を提示する。

1. 木下昌巳中尉の場合

9 月 6 日早朝から西山，松山，横山の各陣地は迫撃砲の集中攻撃を受け，敵味方が入り混じり混戦状態となっていた。いよいよ最後の時が迫っていた。第 7 中隊長の木下中尉は，6 日の夕刻，中隊の兵を一ヶ所に集めた。残存兵は，木下も含めて一富兵長，中野兵長，浜田兵長，松田上等兵，亀

川上等兵など……全部で7名ほどであった。7名のうち負傷していないのは，亀川上等兵ただ1人であった。亀川上等兵は，木下が久留米の原隊に隊付きでいた頃，初年兵として入隊してきて，共に訓練を受けた仲であった。その後今日までかすり傷ひとつない不死身の兵隊である。中野兵長は召集兵で，故郷に妻子を残して来ている。

「中野は木下中尉と一緒だったら，どこにでも付いて行きますけん。」

30歳になる兵隊が23歳の中尉に心服してくれたことが身にしみた。松田上等兵は，中隊でも一番若い色白の美男子の兵隊であった。木下中尉は，一人一人の部下の顔を薄明かりの中で見回しながら，明日は必ずやって来る拉孟の最後の時を覚悟した。

「長い間，みなよく頑張ってくれた。だが，明日は最後となるだろう。師団主力が10日までに救援に来てくれることになっているが，明日中には到底間に合わない。明日は最後となるが，どうか日本のために，神洲の不滅を信じ，俺と一緒に死んでくれ。」

やっとの思いでこれだけ言って一同を見回した。まだ23歳の木下中尉は，人生経験豊富な年長の部下の前に，階級が上であるだけでこのようなことを言わなくてはならなかった。部下の前で「俺と死んでくれ」と言ったものの，木下自身は言った言葉とは裏腹に気持が落ち着かなかった。(1)

6日の17時頃，拉孟守備隊長金光恵次郎少佐が迫撃砲を受け戦死したという報告を，眞鍋大尉から聞いた木下中尉は，「拉孟最後の時は報告のため脱出せよ」と命じた守備隊長の言葉が甦った。その時横股の壕に，1人の兵士が瀕死の状態で入ってきた。木下の同期の加登住中尉であった。見ると軍刀を腰に差して右腕がない。左手には自決用の手榴弾が握られている。彼は関山を守備していて爆撃を受けたのだ。激痛に堪え，うめき声を上げまいと歯を食いしばる加登住の姿を見ながら，「戦死した将兵のご遺族に状況を伝えよ」という金光大隊長の声が再び蘇った。しかし，先刻部下に「俺と死んでくれ」と言ったばかりである。思いあぐねて，現在の守備隊長の眞鍋大尉に胸のうちを告白し判断を委ねた。眞鍋大尉はしばらく考えていたが，「そうか，それではすぐに脱出して報告してくれ」と言って，大尉は部下の功績資料と松井連隊長への手紙をくしゃくしゃの油紙に包んで木下中尉に手渡した。眞鍋大尉の渾身の思いを込めたこの手紙は，その後奇跡的に敵中突破した木下中尉の手で9月中頃に松井連隊長に直接手渡されることになる。眞鍋大尉の手紙が，後に松井連隊長の手記に収められていたことを木下は戦後知った。(2)

後に，木下は「玉砕」の心境を振り返りながらこう語っている。

「『俺と一緒に死んでくれ』と言ったのは本音である。自分も死ななければ兵隊に死ぬことを納得させることはできなかった。しかし，その後眞鍋大尉から『脱出せよ』と命令を受けたが，与

---

(1)　木下昌巳『玉砕』（自費出版，2002年），98–99頁。

(2)　防衛庁防衛研修所戦史室『イラワジ会戦ービルマ防衛の破綻』（朝雲新聞社，1969年），262–263頁。松井秀治連隊長の手記『ビルマ従軍　波瀾回顧』（興竜会本部，1957年）の中に眞鍋大尉の手紙が収められている。

えられた命令を実行する責任が重くのしかかり，自分の生死を考える余裕がなかった。[3]」

時刻は深夜零時を回る頃，木下中尉は共に脱出する伝令の2名を選出した。最初から1人は無傷の亀川上等兵と決めていたが，あと1人はだれにすべきか思いあぐねている時，第8中隊の里美栄兵長が自ら名乗りを挙げた。以前鎮安街で宜撫班にいたため，龍陵までの地理にも詳しく，中国語が話せるということで，もう1人は里美兵長に決まった。3人は紺の中国服に身を包み，帽子，草鞋履きで，ポケットに手榴弾と拳銃を入れ，軍刀を持ち，日章旗を腹に巻き付けた。上着の下には階級章を付けた半袖の防暑服を着ていた。よく見れば滑稽な服装で相当に怪しい風体である。慌しく支度を整え，7日の午前3時に陣地を脱出した。3人は水無川に向かって道なき急斜面を下る。幸い中国兵に遭遇せずに，雨季で増水している水無川を渡った。夜が明け始めた。中国兵に見つからないように狭い道を登る。しかし，ついに上方にいた中国兵に見つかり，機関銃と小銃の一斉射撃を受ける。道から再び水無川斜面をすべり下り，木下中尉と亀川上等兵は同じ岩陰に難を逃れた。里美兵長は20メートルほど離れた岩に隠れた。1時間ほど身を潜めていていると，中国兵の声が聞こえなくなり，辺りが静かになった。

今度は対岸の拉孟陣地の砲声が聞こえ始めた。3人が身を潜めている場所は，横股陣地と同じ位の高さにある峰の中腹であった。横股陣地まで二，三千メートルの距離だが，手に取るように戦況が見えた。午前中，西山，横股に集中的に砲弾が撃ち込まれた。午後になっても攻撃は続き，西山，松山は陥落した。残るは一番低い100メートル四方の横股陣地に味方は追い詰められた。守兵一丸となって最後の断末魔を繰り広げる姿が目に浮かんだ。[4]

戦後，福岡の慰霊祭で木下中尉は，同じ中隊の上野正義上等兵から，横股陣地の最後の様子を聞いた。彼は9月3日，松山陣地を夜襲で奪回した後，同陣地に残してきた兵隊であった。

「自分が9月7日夕，松山陣地が敵に占領され，横股陣地に降りてきた時，眞鍋大尉らは，ウワーと歓声をあげながら敵の中に斬り込んで行った。続いて三苕曹長等も壕から飛び出して，『チャンコロ出て来い』と叫びながら敵中に斬り込んで行った。[5]」

2. 早見正則上等兵の場合

陥落した音部山陣地から早見上等兵は西山陣地へ後退した。間違って中国軍の壕に入り，中国兵に尻を銃剣で突かれ無我夢中で逃げた。途中，黄燐弾が衣服に付着し光って的当てになってしまうので，手で拭(ぬぐ)ったが広がるだけで取れなかった。窒息しそうな燐の臭いに耐え，動悸が止まらなかった。[6]

---

(3) 木下の聞き取り（2002年12月6日）。
(4) 木下前掲書『玉砕』，111–112頁。
(5) 同上，113頁。
(6) 早見の聞き取り（2005年9月6日）。

早見は6日の朝6時に西山陣地に着いた。西山の壕は負傷兵でいっぱいだった。正午頃，師団より最後の連絡が入った。無線機の焼却と重傷病兵の自決を促す内容であった。元気な兵隊が，重傷の兵隊に昇汞錠を泥水で飲ませた。なかには昇汞を飲まずとも，手持ちの手榴弾で自決した兵もいた。早見も昇汞錠を2錠もらったが，いつのまにか捨ててしまって，手榴弾1発だけを所持した。西山陣地に下がった早見は，「蛸壺」と呼ばれる1人用の壕で，身動きがとれなくなった3人の負傷兵が手榴弾で自決するのを目撃した。この悲惨な光景は，早見には終生忘れることができない出来事であった。元気な者は，最後の陣地となった横股陣地へ下がった。(7)

夜明けと同時に中国軍の砲弾が始まった。早見上等兵は横股陣地で一夜を明かし，9月7日の朝を迎えた。最後の時，守備隊長は眞鍋大尉に委ねられていた。7日の朝，眞鍋大尉の伝令を務めていた早見上等兵の証言によると，眞鍋大尉は興奮して気が狂ったように見えた。午後2時，軍旗の棹頭の菊の紋章を横股陣地の倉庫の横に埋めた。

午後4時頃，いよいよ最後の時がきた。誰だか分からないが，将校が「生き残りの兵隊は，水無川まで降りよ！　そして本隊に追求するんだ！」と大声で叫んだのを早見は聞いた。公刊戦史には，「9月7日，眞鍋大尉は横股陣地の砲兵掩蓋の中で軍旗を奉焼」(8)と書かれているが，眞鍋大尉がこの時軍旗を襷に掛け，軍刀を振りかざして松山陣地の中国軍に向かって突っ込んで行ったのを早見は目撃している。(9)これが眞鍋大尉の最期の姿であった。早見らは焼け残った野戦倉庫から乾パンや牛缶などの食糧を雑嚢にいっぱい詰めて，横股陣地から水無川に向かって谷へ降りた。谷を降りる兵隊は片足を失い松葉杖にすがり，ある者は両腕を失い，達磨のようになって横股の絶壁を転げ落ちる姿は哀れな敗残の姿であった。中国軍の容赦ない襲撃で多くの兵隊がバタバタと倒れた。水無川の川岸に辿り着いた早見らのグループは総員25名であった。(10)

3. 森本謝上等兵・鳥飼久伍長の場合

森本も早見と同じく，誰か分らないが将校の「本隊へ追求せよ」という命令を聞いた。森本はこの時の声が関山陣地で爆死したと言われた辻大尉ではなかったかと思っている。森本は龍陵に向かう道中で，第2大隊の羽野伍長と香川兵長に偶然逢ったが，最後に生き残ったのは森本だけであり，森本も早見と同じく捕虜となって生還した。(11)

鳥飼兵長も無我夢中で水無川へ駆け降りた。頭上から中国軍の銃弾がシュッ，シュッと追いかけてきた。8日の朝，鳥飼らを引率していた第6中隊の軍曹は，中国軍の便衣の襲撃を受け，ここま

(7)　早見正則「拉孟玉砕の真相とわが脱出記」，108–109頁（森本謝『玉砕　ああ拉孟守備隊』青柳工業株式会社，1981年所収）。
(8)　前掲書『イラワジ会戦』，283頁。
(9)　早見正則の聞き取り（2005年9月6日）。
(10)　早見前掲書，109–110頁。
(11)　森本前掲書，63–69頁。

でと思った軍曹は「先に行け！」と言って手榴弾で自決した。軍曹の死後，8 名のグループは半分に分かれて龍陵の司令部を目指しが，このグループで龍陵の師団司令部に辿り着いたのは鳥飼兵長と村上上等兵（その後，北ビルマにて戦死）の 2 名だけであった。(12)

4. 慰安婦たちの場合

衛生兵の吉武兵長は，全滅の前日か，2 日前に，壕の中で慰安婦らに大声で泣きつかれた。「どこでもいい，この場から一緒に連れて逃げてェ」とすがりつく。その時まで 20 名の慰安婦はみな無事だった。服装は兵隊服やモンペでなく，女物のワンピースを着ていた。吉武兵長は，彼女らが不憫でたまらなかったが，「どうしてやることもできない，一緒に死のう」と言うしかなかった。全滅の日，慰安婦にも昇汞錠が配られた。(13)

横股陣地の壕からは自決した日本兵と共に 2 名の慰安婦の死体が発見された。自決兵の手榴弾の巻き添えになったのか，もらった昇汞錠で自決したのかは定かではない。

第 33 軍作戦参謀の辻政信が『十五対一』の中で，「日本人慰安婦は晴着の和服に最後のお化粧をして青酸カリをあおり，数十名一団となって散り，朝鮮娘 5 名だけが生存者として敵軍に投降したことは傍受電報で明らかにされた」(14)と書いているが，日本人慰安婦は死に化粧もしていないし晴着も着ていない。青酸カリをあおり，朝鮮慰安婦を逃して，大和撫子は死を選ぶとは，辻の捏造した「美談」であり事実とは違う。

II. 横股陣地の脱出

1. 木下昌巳中尉の場合

7 日夕刻，中国軍の砲撃が止む。岩陰にいた木下中尉が時計を見ると午後 6 時であった。拉孟守備隊の残存兵も力尽きて全滅した。木下は陣地を見つめたまま無言で日没を待った。岩陰から拉孟の最後を見届けた木下中尉らには重大な任務が残っていた。木下中尉は出発の命を下したが，里美兵長の姿がどこにもない。地理に詳しく中国語のできる里美兵長がいないのは大きな痛手だった。こんな若い将校と一緒では頼りないので単独行動を決意したのか？　伝単に惑わされ，降伏したのか？　死体はなく戦死した様子もなかった。木下中尉は時間がないので捜索を諦めて，亀川上等兵と 2 人西北に向かって先を急いだ。

途中，木下は腹痛と血便に苦しみ，ついにマラリア熱で倒れた。休息後，9 日の夜明けに出発。飲まず食わずの強行軍であり，身体の衰弱は激しかった。途中，中国人民家に押し入り，食べ物を乞

(12) 鳥飼久「拉孟脱出記」，87–88 頁（森本前掲書所収）。
(13) 品野実『異域の鬼ー拉孟全滅への道』（谷沢書房，1981 年），322–323 頁。
(14) 辻政信『十五対一　ビルマの死闘』（酣燈社，1950 年），129 頁。

う。家人がお粥を作ってくれて2人は無我夢中で食べた。民家を出ると，前方から中国兵が馬に荷を乗せてやって来るのが見えたが，襲撃はせずに身を潜めてやり過ごした。しかし，今度はもう逃げ道がない。中国兵とすれ違うことになる。この時，亀川上等兵が道端の馬糞を食う馬鹿者の真似をしておどけて中国兵の気をそらせた。亀川のとっさの気転で何とか難を逃れることができた。

9月10日，龍陵付近で日本軍と中国軍の戦闘の爆音を耳にする。日本軍陣地が近いことを確認し小休止した。寸前で日本軍に危うく撃たれそうになった。中国服を着ていたので中国人と間違えられたのだ。亀川上等兵が腹に巻いていた日章旗を必死に振ったら射撃は止んだ。

龍陵の山の中をさ迷い歩いていた2人は，山中で勇兵団工兵の田中一義中尉に出会って握り飯をもらった。木下は田中中尉の名前を覚えていた。(15) 田中中尉の手記の中にも，2人の日本人に弁当を分けてやったという記載がある。

「師団の命令受領を終えて，山麓の雑木林の中に入って昼食を食べようとしたとき，目の前に農民の服装に身をやつした日本人2人が，天秤棒に篭を吊るしてやって来た。騰越から敵の重囲を脱して来たと言う。たくさんの情報を持っているから報告したいと言う。真偽は判らないが司令部に行くよう言って，食べようとしていた弁当を出すと，彼らは2人で等分して嬉しそうに食べた。(16)」

田中中尉は「騰越から来た2人」と書いているが，これは拉孟の誤りだろう。田中は2人の名前は覚えていなかったが，彼が記載した農民にやつした2人組みとは，その時の状況と風体から木下中尉と亀川上等兵に間違いない。

龍陵の山中で，2人は握り飯や地下足袋をもらい，多くの兵隊に助けられながら，9月12日の夕暮れ近くに，無事に龍陵の師団司令部に到着した。

到着後早速，木下中尉は第56師団長松山祐三中将，歩兵第113連隊長松井秀治大佐，野砲兵第56連隊長山﨑周一郎大佐らに，拉孟守備隊全滅の戦闘報告を行った。木下中尉は報告終了後，師団参謀部勤務を命ぜられ，10月半ばまで龍陵の司令部と拉孟守備隊の交信の電報記録を参考に，拉孟の戦闘記録の整理にあたった。木下中尉は，この時金光守備隊長が打電した「金光電」の全てに目を通した。

昭和19年8月23日17：00に金光少佐は，松山師団長に「最悪の場合のため砲兵隊木下昌巳中尉を脱出報告せしめる」と打電していた。その「金光電」の中に木下は，自分の名前を見つけた。木

---

(15) 木下前掲書『玉砕』，127頁。

(16) 第二師団勇会『第二師団の栄光と悲劇の歴史』(2001年5月14日)，453頁。著者は，2006年4月初旬に，杉並の善福寺で行われた勇兵団工兵の慰霊祭に参列した。善福寺の住職がかつての田中一義中尉であった。境内には雲南・ビルマ戦線で命を落とした全ての人々の御魂を慰霊する慰霊塔が建立され，そばに桜の木々が見事な花をつけて咲き誇っていた。60数年前に，鎮魂のために田中住職が寺の敷地に植えた桜である。

下中尉の報告が，後の拉孟守備隊の全滅戦闘の公刊戦史の資料となった。[17]

拉孟から龍陵までの距離は，約 60 キロメートルある。周辺は海抜 2 千メートル以上の険路の山岳地帯で，容易く歩ける道などなかった。そのうえ，数十倍の米式装備の中国軍の包囲を突破して，師団司令部に辿り着ける確率とは如何ほどであっただろうか。金光守備隊長から受けた「脱出報告」という任務を木下中尉は無事果たした。

2. 早見正則上等兵の場合

1944 年 9 月 7 日夕刻，最後の死闘の直前に，早見上等兵は，誰だか分らないが将校が「(龍陵の) 本隊へ追求せよ！　と叫んだ声を聞いた。その時，同じ壕にいた 25 名の守備兵が横股陣地から脱出した。早見は脱出時に横股の倉庫に立ち入り，食糧を持って陣地の急斜面を下った。水無川に午後 5 時頃（日本時間）に着いた。水無川は雨季で増水していたので，夜半の渡河は諦めて，天幕を張って夜を明かした。夜が明けてすぐに水無川を渡ったが，流れが激しく途中で 2 人が流され，脱出兵は 23 名になった。早見は脚気がひどく足が膨れ上がっていて，マラリア熱も出ていた。ふやけて麩のようになった乾麺を食べながら，川の中を半日歩き続けた。それでも空腹はおさまらず，一軒の民家を見つけて戸口をふさいだ後，中に押し入った。食べ物を乞うて，とうもろこしを焼いてもらってむしゃぶりついた。雲南のとうもろこしはとても甘くてうまかった。

早見ら脱出兵の一行が，道中で中国軍の輸送隊を襲撃したことが早見の証言から明らかになった。[18] 早見によると，民家を出て歩いていると，武のマークを胸に付けた中国軍の将校を先頭に，馬を 1 頭ずつ引いた 6 人の隊商人に出会った。この記述は品野実の『異域の鬼』の中にも登場するが，[19] 襲撃された 6 名の中国人の仔細は明らかにされていない。昨今，現地の証言記録から 6 名の中国人の名前と襲撃事件の詳細が判明した。輸送隊 6 名の氏名は，陳応志，楊徳林，範汝群，範寿和，陳定斤，陳定華である。以下が中国史料にある早見ら脱出兵一行に襲撃された 6 人の中国隊商についての記述である。

「日本兵らは，輸送隊の先頭を行く陳応志，楊徳林，範汝群に『何をしているのだ』と尋問した。3 人は『我々は農民で，新城街，邦遠街，鎮安街に塩を売りに行きます。』と答えた。続けて日本兵はまた尋問した。『中国遠征軍への支援物資の塩ではないか？』楊徳林は，『いいえ，違います。我々は間違いなく農民で，農閑期のささやかな生活費稼ぎです。』と答えた。輸送隊の 6 名は，すんなり通過できると思った途端，7，8 名の日本軍の残兵は目配せをして，竹村の狭い窪地で 6 名を襲撃し服を剝ぎ取った。その後，楊徳林，陳応志，範汝群の 3 人は日本刀で斬殺された。範寿和は崖の下に飛び降り，幸い怪我がなかった。陳定斤，陳定華も飛び降りた。陳

(17) 前掲書『イラワジ会戦』，281 頁。
(18) 早見の聞き取り（2005 年 9 月 6 日）。
(19) 品野前掲書，338–339 頁。

定斤はその瞬間，肩と手をひどく切られた。陳定華は，日本兵に肩を叩き切られ，木の枝に吊るされた。[20]」

日本兵らは6名の輸送隊を襲撃した後，輸送隊の梱包の中身を調べてみたが塩は入っていなかった。中国の中山票（中国紙幣＝中山は孫文の号。日本亡命中に中山樵と名乗ったことから，孫文をさす呼称となる）の束や小銃弾，手榴弾，草鞋などが入っていた。中国銃の弾は役に立たないが，中山票や手榴弾や草鞋を雑嚢に詰め込んで立ち去った。[21]

さらに早見らは山道をしばらく行くと，再び，30人ほどの中国軍の輸送隊に遭遇した。今度は中国兵の軍服を手に入れるために襲撃した。相手の人数は多いが前後にいる兵のみが小銃持っていたので，断崖の細い道で輸送隊の前後を押さえ込んで，相手の逃げ場を奪った。早見はその時のことを思い出しながら語った。

「服を剝いでみると，下着も着けていない若い中国娘ばかりで，服はどれも小さくて合わず，半分ぐらいしか着ることができなかった。娘たちを斬殺して馬もろとも谷に突き落とした。娘たちのキャーッという甲高い悲鳴が山にこだましてずっと耳に残った。[22]」

中国史料によると，「2名の男兵以外の残りは皆女兵であり，しかも皆18歳から23歳未満の未婚女性で，彼女たちは辱めを受けた[23]」とある。小銃を携えた2名の男兵が輸送隊の前後に分かれ，女たちを護衛していたのだ。

さらに中国史料には，斬殺された6名のうち楊徳林と範汝群の家族の行く末についても記述されている。楊徳林の妻の陳福珍と4人の子供が残された。当時一番上の子が15歳，一番下の子が1歳だった。陳福珍は子供を養育するために義弟を頼ったが，義弟の家も貧しかった。陳福珍と義弟の妻の2人の女性の足は，纏足の布で包まれていて畑仕事ができなかった。義弟1人の稼ぎで10人もの家族を食べさせなくてはならない。いつも粟や木の皮や草の根を食べて飢えを凌いだ。もう1人の被害者，範汝群が斬殺された後，前妻は病死し，後妻は家を出てしまったため，残された2人の娘は叔母の養女となったが，生活は長期にわたり貧困を極めた。[24]

やがて辺りが暗くなってきた。早見ら一行は，風鈴村という部落に着くと，犬が吠えながら住民が追いかけて来たので，人目に付かぬように，脱出兵23名を3人から5人の班に分けて小人数で行動することにした。早見上等兵は5人組の班にいた。その後，5組のうちのひと組には途中で出会えたが，他の組とは2度と会うことはなかった。

早見らは食糧を調達するために，風鈴村の民家を襲撃した。その時の様子を次のように証言して

---

(20) 馬建坤，楊換果（口述），陳景東（整理）「惨遇日本軍殺害的馬帮隊」，205頁（中国人民政治協商会議雲南省龍陵県委員会編『松山作証』雲南美術出版社，2005年所収）。

(21) 品野前掲書，338頁。

(22) 早見正則の聞き取り（2005年9月6日）。

(23) 前掲書「惨遇日本軍殺害的馬帮隊」，206頁。

(24) 同上，206–207頁。

いる。

「5人でまた民家に押し入った。この家は村長の家で，夫婦と娘の3人暮らしであった。その晩，早見ら5人は1階に泊めてもらい，一家は2階で寝た。新品の中国服をもらった。翌朝，親父が2階の屋根瓦を剝いで逃走し，数人と首から弾をぶら下げ，武器を持って戻って来るところを目撃した。早見らは急いで家を出て藪に隠れ，必死に山を下って逃げたが，5人のうち3人は撃ち殺された。早見ともう1人は藪の中の川に半日身を浸して隠れた。ここから龍陵の本隊に行くには中国軍の陣地を突破するしかない。[25]」

早見は龍陵の師団司令部へ辿り着くために，中国軍陣地の突破を決心した。以下は早見の証言に基づいて[26]，筆者が簡略にまとめたものである。

中国兵に「どこへ行く？」と聞かれたので，指を口に当て前方を指しながら，おしの真似をして1回目は無事通過した。2回目も食管を抱えた中国兵に「おまえは誰だ？」と聞かれて同様におしの真似をしてきり抜けた。この時，藪に一目散に2人で逃げたのだが，早見はこの時，もう1人の脱出兵と逸れてしまった。彼は鹿児島出身であったが名前は覚えていない。そこには滝壷があって，口笛を吹いても滝の音で消されてしまった。味方同士の合言葉は，「拉孟」と言ったら「騰越」だった。

ついに早見は1人になった。川を渡り，藪の中で寝た。夜が明けた。天気の良い日だった。前方は米軍と中国軍だらけである。爆撃の音がする。中国軍が龍陵を攻撃しているのだ。竹藪の中で身を潜めていたが，藪蚊がひどくて長居ができなかった。警備兵に呼び止められ「どこへ行くのか？」と聞かれたので，またおしの真似をして逃げた。さらに龍陵に向かって歩いていると，米兵4名と中国兵6名に遭遇し，ついに正体を見破られ捕まった。この時，早見は手榴弾を2個携帯していた。今回の相手は，米軍人と中国人将校だったので，最前線陣地に向かう「民間人」の怪しさを見逃さなかった。早見が捕まったのは龍陵の東山陣地である。日本軍陣地まで，あと一歩のところだった。ここからが逆戻り。竜川江を下り，米中連合軍本部のあるラモウ街（松山拉孟とは違う）へ連行された。道中に日本人の死体が散乱していた。中国兵に「おまえもこうなる」と指をさされた。連合軍本部の米軍テントの中にはベッドが4つあり，蚊帳が掛けられていた。ランプは全てガス灯であった。

3. 朴永心（パクヨムシム）の場合

拉孟陣地の陥落が刻一刻と迫っていた。吉武伍長は，最後の横股陣地から，慰安婦の何人かが飛び出すのを見た。この中に『若春』，本名朴永心も含まれていた。朴永心は，最後の横股の壕での心境を次のように語った。

「このまま故郷に帰ることもできずに死んでしまうのかと，みんなで泣きました。それまで何度も死にたいと思ってきたけれど，こんなところで無残に死にたくない。生きることも死ぬこと

(25) 早見正則の聞き取り（2005年9月6日）。
(26) 同上。

もできない，それは地獄のような恐怖でした。[27]」

「地獄」で惨死したくないという思いが，永心に生き延びることを決心させた。永心は壕を逃げ出してから中国兵に見つかるまでのことを，こう記憶している。

「壕の中には日本兵と女性たちが20名ほどいました。日本軍が軍旗を燃やしたと話しているのを聞いて，日本は負けたのだと思い怖くなりました。日本人の女性が『一緒に逃げよう』と言ったので，私はすぐさま壕を飛び出したのです。他にも数人の女性たちが飛び出しました。……どこをどう逃げたか分りません。とにかく山を下って川の方へ逃げていきました。川の近くにとうもろこし畑があり，あまりにお腹が空いていたので我慢できずに畑に入って夢中でとうもろこしを食べました。その時に，中国兵に見つかってしまったのです。4人ぐらいいたように思います。私は中国兵に殺されるのではないかと思ってガタガタふるえていましたが，1人が『安心しなさい』と言ったので，殺されるのではないと思いました。とうもろこしを食べているころからお腹が痛くなり，苦しくてどうしようもありませんでした。私の様子を見て中国兵が『おしっこをしろ』と言い，用を足してしばらく休んでから山の上に連れていかれたのです。この時には出血が始まっていて，歩くのも辛くて苦しかった。流産しかかっていたのです。私と一緒に逃げ出した慶尚道出身の女性は，中国兵の姿を見て川に飛び込みましたが，私もできることなら川に飛び込んで死にたかった。これからどうなるのか怖くて不安でたまりませんでした。[28]」

朴永心は中国軍に捕えられた時，下腹部から激しい出血があった。切迫流産しかかっていた。中国の医者の手術を受けたが，お腹の子は死産であった。永心は治療を受けた後，保山，楚雄の収容所を経て，昆明の捕虜収容所へ連行された。

4. 森本謝上等兵の場合

森本上等兵は横股陣地を脱出し，中国軍の追撃射撃のなか水無川に向かって駆け降りる瞬間，横に外れて山中に潜んだので射殺されずに助かった。山中をさ迷っていると同じ第2大隊の羽野伍長と香川兵長に遭遇したが，2人はまもなく中国兵に見つかり，最初に羽野伍長が，次に香川兵長が襲撃され命を落とした。森本は1人だけ取り残された不運を嘆くとともに後方の師団司令部に辿り着いて拉孟の状況を報告することが唯一自分にできる使命だと決心した。この時の森本上等兵は，師団への報告のため，ひそかに脱出した木下中尉の存在を知らない。森本は拉孟を脱出した生存者は自分1人だけだと信じていた。だからこそ，強靭な精神力を発揮できたのである。拉孟を脱出してから殆ど何も食べていなかった。食べたものといえば，名も知らない草だけであった。飲み水と

(27) 西野瑠美子『戦場の「慰安婦」―拉孟全滅戦を生き延びた朴永心の軌跡』(明石書店，2003年)，107頁。

(28) 同上，111–112頁。

いえばスコールの時の雨水だけである。夜は酷く寒いが，昼は日照りの厳しい暑さのなかで，喉の渇きにもはや我慢ができなくなった森本は，遂に自分の小便を手に受けて飲むようになった。森本はこの時，生に執着する人間の浅ましさを自分で確かめたようで，何ともいえない怒りと悲しさを，何かにぶつけたい気持でいっぱいになった。脱出後 19 日間ぐらい経っていたが，精根尽きても死ねなかったのは，「悲惨な拉孟の状況を伝えたい」その一念があったからである。

ある夜，前方に明かりがボンヤリ見えた。懐かしさと嬉しさでその方向にヨロヨロと足を向けた。そこは中国軍の陣地であった。手榴弾を握った途端，頭をガァーンと殴られ捕虜となった。捕虜になったら必ず殺されると聞かされていたので銃殺を覚悟した。しかし，中国軍は森本に服を着せ，鉄帽一杯の汁かけ飯を与えられた。その時の食事の美味しかったことは終生忘れられなかった。満腹した後は死んだように眠った。森本は，その時，苦しいとか悲しいとか，残念であるとか負傷している傷口が痛むとか，そのような人間的な感情を失った一匹の動物と同じだった。(29)

III. 昆明捕虜収容所

1. 早見正則上等兵の場合

早見上等兵は東山で捕虜になった後，保山の捕虜収容所に収容されたが，全身 12 箇所の怪我とマラリア熱が悪化したので，楚雄の中国陸軍病院に入院した。彼は負傷した中国軍の将校と同じ部屋で隣のベッドになった。中国人将校は早見を大変可愛がった。早見は将校から 2 回も小遣いをもらって，1 人で町に買い物に行くことができた。

早見は当時のことを次のように話した。

「私は蔣介石から 2 回お使い銭をもらってね。アメリカの缶詰の缶を手に入れるのに一生懸命だった。ハイカラな缶に針金を付けて買い物籠にして，それを持って町まで買い物に行きよった。ホルモンこうてくるとや。これがうまいんだよ。病院では中国軍の将校が数人おって，ある将校が私を気に入ってね，お金渡されて，日本の歌を教えてくれと言われた。『忘れられない，あの面影よ……』（何日君再来）という歌を教えると，将校は日本語で覚えようとした。それからもようしてくれたな。将校の部屋ばっかりおったよ。(30)」

この病院では，月 2 回，蔣介石から小遣銭が支給され，入院中の外出も自由であった。早見は，さらに同室の中国人将校からもお小遣いを貰っていたことになる。この将校は，日本の陸軍士官学校を出ているエリート軍人であった。早見上等兵は 3 週間ほど楚雄の陸軍病院に入院した。傷がほとんど完治したので，保山の捕虜収容所に戻された。ここでも歩哨が 2 名いたが，外出は自由だった。保山に 1 ヶ月ほどいて，次は昆明収容所へ移された。

---

(29) 森本前掲書，64–74 頁。
(30) 早見の聞き取り（2005 年 9 月 6 日）。

連合軍の捕虜尋問報告書の中に「昆明収容所における朝鮮人及び日本人捕虜」(1945 年 4 月 28 日)について書かれた覚書がある。[31] その中の「日本人捕虜名簿」の中に,「HAYAMI Masanori」の名前があった。名簿の項目には,軍隊での所属と階級氏名,捕獲場所と日時,学歴が記載されており,早見正則については「歩兵第 113 連隊,上等兵,松山で 1944 年 9 月 22 日捕獲,高等小学校卒」とある。

昆明収容所には,韓国人 25 名(女性 23 名,男性 2 名),日本人 81 名(女性 4 名,男性 77 名)の 106 名が収容されていた。日本人捕虜 77 名の所属はほとんど第 56 師団の第 113 連隊か第 148 連隊であった。早見と同じ松山で捕獲された兵士は,早見を含めて 14 名,騰越は 25 名で,松山と騰越を合わせた 39 名でほぼ半数に及んだ。また,追求を恐れて,偽名を使った兵士も多かったが,早見正則は実名だった。森本は手記の中で,収容所では「当時,所属部隊も,所属名も名乗らず,本名も使わず,偽名を使っていた」[32]と書いている。森本は偽名を使っていたので見当たらない。

日本兵 77 名の捕虜のうち,67 名は収容所において情報の提供を行っている。また,4 名の日本兵は,1944 年 9 月 9 日頃,朝鮮人ホウの手引きで逃亡し,中国軍に投降した。そのうちの 2 名は,日本の体制に反対し,民主的な日本を支持することを自ら宣言した。

ホウの報告によると,「第 56 師団の男たちは死に物狂いで戦った。日本の兵隊の愛国心は強く,公式の日本的思考がいまだに男たちの心を支配しているようだ。」[33]

アメリカは「中国戦域における日本人捕虜の心理的教化」[34]という報告書の中で,民主的な路線で戦後日本の健全な復興計画を確立するためには,中国における敗残兵を,日本に戻す前に,彼らにこのプログラムを理解し受け入れるように精神的に教化すべきである」と述べている。

この教化プログラムを円滑に推進させるために活躍したのが,米軍所属の日系二世であった。早見も昆明の収容所で,ハワイ出身の日系二世「タナカ」の通訳のおかげで,コミュニケーションがスムーズに取れて助かったと証言している。

> 「最初は日本軍が負けたことは信じていなかった。日本の敗戦を祝って中国人が爆竹を鳴らしていた音を聞いて,日本軍が攻めて来たと信じていた。タナカさんが説明してくれなかったら,ずっと日本は負けていないと信じていたでしょう。」[35]

さらに,昆明収容所での日常生活について,早見は次のように語っている。[36]

> 「収容所ではお腹が空くから,毎晩野菜泥棒に出かけたな。収容所の隣に精華女学校があって,

---

(31) *Korean And Japanese Prisoners of War in Kunming, 28 April, 1945.* RG 226 Records of the Office of Strategic Services, National Archives in USA.

(32) 森本前掲書,79 頁。

(33) *Korean and Japanese Prisoners of War in Kunming, 28 April, 1945.*

(34) *Psychological Indoctrination of Japanese Prisoners of War in the Chinese Theater, 1945.*

(35) 早見の聞き取り(2005 年 9 月 6 日)。

(36) 早見の聞き取り(2005 年 9 月 6 日)。

鉄条網を越えて広い農園に忍び込んで野菜を盗んでいた。便所裏の鉄条網を切って出入り口にしていた。そこにはあらゆる野菜がいっぱいあった。その横に井戸があって，そこに米をとぎに行っとった。井戸につるべがついていてな。ある夜，安奈兵長は，野菜泥棒が護衛に見つかり撃たれちゃてね。同じ頃，朝鮮人慰安婦の『弘子』さんがマラリア熱で亡くなったので，2人一緒に葬式をしたんよ。」

この事件を機に，捕虜の食事がいくらか改善されたらしい。

早見は収容所での仕事は楽なものが多かったと言う。

「朝9時になると，タンクを作る人，倉庫の整理に行く人に分かれ，女性は病院のシーツの洗濯に行く。倉庫に行く人がものすごく多かった。帰りにおみやげあるけんね。帰る時は，いろいろな物を詰めこんで，お相撲さんのようにお腹を膨らませて，こげんになったと。アメリカ兵の見張り2名は，見て見ぬふりをしていた。持っていけと言わんばかりだったな。帰って来ると，中国人が皆買いに来た。日本人は食べ物や煙草がほしくて，中国人はタオルなどのアメリカ製の日用品をほしがった。」

早見は続けた。

「テントだけはアメリカ製だったが，収容所は中国の管轄だった。食事も中国のもので，毛布も中国製。中国の毛布は毛足がとても長かったので，器用な人は，それを解いて，靴下を編んで金にしておった。それで煙草やら買いおる。」

2. 森本謝上等兵の場合

捕虜の身となった森本が最初に連れていかれたのが保山収容所であった。収容所には日本軍捕虜が40名ほどいた。多くの日本兵は皆やせこけて栄養失調状態にあった。何処の部隊か明かすことはなく，お互いに自分の名前も名乗らず人目を避けていた。当時の日本軍では，捕虜になることを一番の恥辱だと教え込まれていたからである。収容所の食事はコウリャン飯に塩汁だけの粗末なものであったが，それでも兵士たちにはご馳走であった[37]。その後，昆明収容所に移されたが，昆明の給与は保山と違って大変よかったので，体力も次第に回復した。昆明には捕虜が70名ぐらいいた。使役労働もそれほどきつくなく，作業の後，米軍のシャツやズボン，タオル等を腹に巻きつけて，宿舎のテントに持ち帰った。失敬した品物は中国兵と一緒に町に出た時，町の民間人に売りさばき，今度は日用品や食糧などを購入した[38]。

収容所の生活にも慣れた頃，8月15日に日本が無条件降伏したことを，昆明の収容所で聞かされた。

---

(37) 森本前掲書，75頁。
(38) 同上，76頁。

3. 朴永心の場合

韓国人 25 名のうち，23 名の女性は，全員慰安婦であった。先の連合軍捕虜尋問報告書の「韓国人捕虜名簿」の中に，朴永心の名前があった。名簿の項目は，名前，年齢，出身地，連行年月が記載されており，永心については「平安南道出身，Pak Yong-sim（パク・ヨンシム），23 歳，1939 年 8 月，朝鮮を出る」とある。男性の 2 名は，民間の通訳者ノー・ピョン・チョイと 36 歳のファン・ナムスク（黄南淑）の息子 16 歳のファン・ピョンギュンである。(39)

捕虜尋問報告書の中で，慰安婦について次のような説明書きがなされている。

「彼女たちは，明らかに，強制的に，また騙されて慰安婦になった。例えば，1943 年 7 月に韓国を出た 15 名は，朝鮮の新聞広告でシンガポールにある日本の工場で女子を募集しているという広告に応募した。同様の誤解で，少なくとも 300 人の少女たちが南方に送られた。」

朴永心もまた騙された 1 人であった。永心は南浦市後浦洞にある洋品店に下女奉公に出されていた。ある日店に現れた日本人巡査に「お金が稼げる仕事があるが，お前も行かないか」と誘われた。1939 年 8 月のことである。憲兵に平壌駅で引き渡された永心ら十数名の娘たちは，貨車とトラックで南京まで連行された。永心が最初に入れられたのは「キンスイ楼」と呼ばれる南京の慰安所であった。「19」とう番号札が掛かった部屋が永心の部屋であった。永心は本名を奪われ『歌丸』とされ，ここから彼女の屈辱と地獄の日々が始まる。(40)

同様に韓国人慰安婦の名簿に，尹慶愛（ユンギョンエ）の名前がある。名簿には「黄海南道出身，Yun kyong（ユン・ギョンエ），26 歳，1942 年 7 月連行」とある。1942 年平壌にいた尹もまた「金になる仕事がある。おいしいものが食べられ，きれいな着物が着られる仕事を紹介する」という日本人の求人案内に騙されて慰安婦にさせられた 1 人である。数百名の尹らのような若い娘を乗せた船が 7 隻もビルマへ向かった。1942 年 8 月に尹はラングーンに上陸した。この船の一行に朴永心も乗っていた可能性が高い。永心が南京からビルマのラシオの慰安所に連行されたのは 1942 年の初夏であった。ここで永心は『若春』と呼ばれた。1942 年末に，拉孟陣地に慰安所が設置された。永心が拉孟の慰安所に連れてこられたのは，中国軍の反攻作戦前であったことから，少なくとも 1943 年 6 月前の乾季の頃だと推測される。

捕虜尋問報告書には引き続き次のように記載されている。

「以上の朝鮮人たちは皆，1944 年 9 月に中国の部隊に逃げてきた。23 人の慰安婦のうち 13 人と少年 1 人は騰越で投降した。彼女たちは第 56 師団の第 148 連隊の所属であった。残りの 10 名は，松山（拉孟）周辺で投降した。第 56 師団の第 113 連隊の所属であった。通訳ノー・ピョン・チョイも騰越で投降し，第 18 師団の第 114 連隊所属であった。」

歩兵第 148 連隊とは騰越守備隊の主力であり，歩兵 113 連隊は拉孟守備隊の主力である。中国側で

(39) *Korean and Japanese Prisoners of War in Kunming, 28 April, 1945.*

(40) 西野前掲書，19–21 頁。

は，朝鮮人は捕えられたのではなく自発的に中国軍に投降したと見なしている。彼女たちは，我々に誠意に満ちた確かな情報を提供したと書かれている。慰安婦たちに尋問が早速行われた。

日本人の女性4名も慰安婦である。大分県出身の『双葉』，大牟田市出身の『誠』，鹿児島出身の『君子』が含まれていた[41]。日本人慰安婦の個人データの記載がないため詳細は分らない。

早見は，朴永心（若春）のこともよく覚えていた。

「昆明の収容所におったときなんかも，若春さんはよく面倒みてくれて，洗濯などしによく来てくれました。中でも谷祐介軍曹と若春さんは仲がよかったな。若春さんは日本語もうまいし，日本の歌もうまくて，よく流行歌を歌ってくれました。とても朗らかで気分の良い人でした。本当にようしてくれました[42]。」

谷祐介主計軍曹は，昆明収容所で慰安婦にもてたので，頻繁に慰安所を利用したと思われていたが，谷は主計という職業柄，公金や官給品を管理する立場なので，慰安所の利用は慎むように指導されたのでこれを遵守したと証言した[43]。

森本も昆明収容所で拉孟にいた慰安婦たちと再会し，次のような思い出を書いている。

「私は顔なじみで以前からよく知っていたので，彼女たちとよく四方山（よもやま）話をした。彼女たちはよく私たちのテントに遊びに来てくれた。しかし，お互いに捕虜の身で，収容所の歩哨の見廻りもあるし，余りガヤガヤと喋り合うことはできなかった。それでも夜になると割合，落ち着いた話もできた。話が始まると，矢張り拉孟の話でもちきりである。お互いに長い，長い，苦闘の日々であった拉孟の思い出話は，いくら話してもつきなかった[44]。」

日本兵と慰安婦たちは，米軍のテントに10人1組の天幕生活をしていた。慰安婦たちと日本兵とは別のテントだったが，交流は自由にできたようだ。

しかし，朴永心は，こうした天幕生活に内心疑問をもっていた。

「彼らは日本兵，私たちは被害者，なぜ同じ牢屋に押し込められるのか？」と疑問を投げかけている。朴永心は『日本軍の女』として最初に松山の地で中国軍の捕虜となった時から，この疑問を心に宿していた[45]。

日本軍の将兵らは，慰安婦たちを『戦友』と呼ぶ者もいる。死線を共に生き抜いてきた連帯感だけで彼女たちとの関係を美化してはいけない。彼女たちの存在理由は，将兵の性欲のはけ口以外の何者でもなく，女性たちの恥辱と苦恨は心身から生涯消えることはなかった。

朴永心は，戦後，朝鮮人慰安婦の補償問題で日本政府を訴えたが，満足いく結果を得ることなく，

---

(41) 太田毅『拉孟ー玉砕戦場の証言』（昭和出版，1984年），271頁。
(42) 早見の聞き取り（2005年9月6日）。
(43) 太田前掲書，80–81頁。谷祐介軍曹も生還しているが，数年前に所在不明となる。
(44) 森本前掲書，78頁。
(45) 朱弘氏の朴永心への聞き取り（2003年11月26日，松山の臨時収容所前にて）。

北朝鮮で 2006 年 8 月 7 日に 85 歳で永眠した。以下は朴永心死去の記事を掲載した『朝鮮新報』の抜粋である。

17 歳の乙女が植民地支配下の故郷，南浦から，日帝の官憲に騙されて，戦場の『慰安婦』として駆り出されていくまでの運命の暗転。朴さんはこう語っている。

「砲弾の嵐の中で，屈辱に満ちた生活を送り，幸運だったのか悲運だったのか，私は死線をくぐり抜けて生き延びてしまった。故郷に帰ってからも当時の記憶に苛まれて，まるで罪人のような気持ちを抱えて生きてきた。悪夢に襲われ，人々に過去のことを知られまいと隠し通し，耐え難い苦痛を抱えて生きてきた私の一生は，一体何だったのか。」（『朝鮮新報』2006 年 8 月 21 日）

IV．むすびにかえて

拉孟守備隊の脱出将校木下昌巳中尉への聞き取りは，2002 年の 11 月から 7 年の長きにわたって実施している。木下中尉の紹介者は，空中投下の飛行隊班長の小林憲一中尉である。東京，仙台，京都，九州各地と訪ね歩き，これまで 20 名以上の戦闘体験者の聞き取り調査を実施した。本稿では，拉孟戦の戦闘体験者のオーラル・ヒストリー（口述史料）と英米中連合軍側の文書史料をクロスさせながら，公刊戦史の記載内容の検証を試みた。記載内容と事実との相違点を指摘し，公刊戦史に記されていない史実を明らかにした。公刊戦史では，連隊長，副連隊長，中隊長までの指揮官による戦闘の経過が時系列に記載されているが，各陣地の戦場の仔細は明らかではない。公刊戦史にあるような「勇戦敢闘」という美辞麗句では語れない戦場の実像は，「まさに地獄の様相であり，言葉では表すことができない」と，2 名の生存者は語っている[46]。全滅戦という過酷な戦況下で 100 日の戦闘を支えた守兵らの精神的な拠り所は，拉孟に残された軍旗であり，軍旗があったからこそ師団の救援部隊が必ずや来ると守兵らは一途な思いで信じていた。しかし，師団からの援軍は最期まで来なかった。

後に木下昌巳中尉は，「玉砕」間近の心境を次にように語っている。

「拉孟では 100 日の戦闘で 2 キロ四方の陣地が次々に占領され，守兵が 300 名，600 名と戦死し，正に『真綿で首を絞められる』という言葉を実感した。そのような中でも，指揮官として弱音を絶対に吐けなかった。部下には師団が『断作戦』を発動して救援に来るからそれまで頑張れと言い続けたが，9 月になる頃には自分としても全くの空念仏だと実感した[47]。」

たとえ軍旗が拉孟にあっても，この頃にはもはや師団の救援の見込みはなく，「全滅やむなし」は全ての守兵の目にも明らかであった。しかし，師団も最初から拉孟を見捨てたわけではない。拉孟

（46） 木下の聞き取り（2009 年 2 月 13 日），早見の聞き取り（2005 年 9 月 6 日）。拉孟守備隊の生還者は十数名いたと言われているが，現在（2009 年）では，木下，早見の 2 名だけが存命。

（47） 木下の聞き取り（2002 年 12 月 6 日）。

守備隊の前連隊長松井秀治大佐は，拉孟守兵を救援しようと必死の試みを重ねたにもかかわらず目的を果すことができなかった。[48] 救援できずとも軍司令部が拉孟守兵に求めたのは退去ではなく「玉砕」であった。救援されずとも守兵らが軍に求めたのは，その日に闘える分の武器弾薬とわずかばかりの食糧であり，軍司令官からの名誉の「感状」ではなかった。そして軍司令部からの至上命令は，最後まで戦闘して死するか，戦闘できぬ者は昇汞錠（塩化水銀）か手榴弾で自決することであった。軍上層部の「全滅やむなし」の判断は，全滅間近の時期ではなく，断作戦発動（9 月 3 日）から 1 ヶ月以上前の 7 月下旬に下されていた。それが事実であれば，拉孟は断作戦発動前には，もはやビルマルートの「最後の砦」ではなかったと言わざるをえない。それにもかかわらず，なぜ，海の孤島ではなく陸続きの中国大陸の戦場で，拉孟守備隊は全滅しなくてはならなかったのか。この問いに対する納得のいく答えはいまだに見当たらない。しかし，あえて拉孟守備隊の全滅の意味を問うならば，ビルマ全戦の早期崩壊を食い止め，師団主力が北ビルマ・雲南地区から撤退するための捨石となったのである。つまり，拉孟守兵の 1300 名の犠牲と引き換えに，他所の大きな兵力を救ったというわけである。

第 33 軍の黍野弘（きびのひろむ）後方参謀は，拉孟や騰越の両守備隊が全滅した時，「凄惨という思いより，ああ，次はこっちの番だな」という心境だったと証言した。[49] 黍野は第 33 軍で一番若い参謀であり，辻政信作戦参謀と共に断作戦を立案し遂行した 1 人である。主に補給などの後方部門を担当し，豪快な性格で武勇伝も多い。[50] 黍野に「当時，断作戦は成功すると思っていたか」と聞いてみると，「成功するとは思っていなかった。おそらく辻さんも内心は同じだったのではないか」と答えている。[51] 辻政信は，自著『十五対一』の中で，「十五対一の敵であるが負けるとは少しも考へない。中国軍相手ならいい勝負だと思った」[52] と書いている。これが本心かどうかは疑問だが，負けるわけにいかない戦ではあったことは事実だろう。黍野は「あの時たとえ負け戦になろうとも戦を止めることは一参謀にはできなかった。それは辻政信でも……」と語っている。[53] 戦争は起きてしまったら，参謀どころか軍司令官さえも止めることが難しいのである。戦争という暴走車は一度走り出したら，ブレーキが効かずに簡単には止まらない。断作戦を立案し指揮した軍上層部の幹部参謀でさえも，無謀で勝算のない作戦であることを認識しつつも全滅戦を阻止できなかった。

「全滅やむなし」という軍上層部の無責任な決断は，拉孟，騰越の両守備隊の全滅に留まらなかった。第 33 軍は断作戦と称して，ビルマルートの遮断と同時に拉孟，騰越の両守備隊の救援を作戦方針に置いていたが，実際はインパール作戦に多くの兵力を取られていたため，拉孟救援作戦に投入

（48） 前掲書『イラワジ会戦』275 頁。
（49） 黍野弘の聞き取り（2005 年 12 月 3 日 偕行社）。
（50） 大正 6 年 4 月 29 日生まれ，平成 20 年 3 月 25 日に逝去（享年 90 歳）。
（51） 黍野の聞き取り（2005 年 12 月 3 日）。
（52） 辻前掲書『十五対一』，97 頁。
（53） 黍野の聞き取り（2005 年 12 月 3 日）。

できる兵力は当初から完全に不足していた。そこで，第 33 軍の指揮下に第 2 師団をはじめ，第 53 師団，第 49 師団の各部隊から成る寄せ集めの抽出部隊をあらたに断作戦に投入したのだ。雲南の地形も知らない戦闘経験不足の抽出部隊は，軍の無謀な作戦命令を受けて全滅戦闘に次々と投入された。全滅必至の拉孟を救援するために投入された抽出部隊には最初から微塵の勝算もなかった。このような第 56 師団主力以外の他師団の抽出部隊による戦闘は公刊戦史から黙殺され，全滅戦であっても拉孟守備隊のように「勇戦と玉砕」として賞賛を浴びて戦史に記載されることはない。師団主力重視の戦闘記録だけが「公刊戦史」として残されるのである。抽出部隊軽視の風潮は日本軍の特質であり，彼らは師団主力の防波堤になり，陽動作戦に駆り出され，危険度の高い戦闘に率先して投入された[54]。拉孟守備隊救出作戦の功名の陰で，こうした抽出部隊は多大な犠牲を強いられる結果となった。中でも師団司令部のあった龍陵の攻防戦（龍陵会戦）はその最たる戦闘である。満足な補給がない日本軍にとって最初から龍陵の防衛戦は不可能であり，唯一の戦法は無謀な先制攻撃と銃剣と手榴弾の夜襲のみであった[55]。

一方で，拉孟守備隊全滅戦の前提として，陣地構築前後の現地住民への戦争被害を想起されてしかるべきであろう。日本軍は何の前触れもなく，現地住民の生活の全てを破壊した。日常の生活を根こそぎ剝ぎ取られただけでなく，数多の老若男女の生命が奪い取られた惨劇は 60 数年たった今でも忘れ去られてはいない。現地住民の戦争被害の中でも，より凄惨と苦渋を味わったのは，慰安婦に供出された女性たちであったかもしれない。彼女たちは，傀儡政権と結託した村の指導者の手引きで「犠牲」を強いられた[56]。彼女たちが拒めば家族や村民に被害が及ぶのは必至であった。彼女たちの抑圧は重層的である。拉孟陣地にいた朝鮮人慰安婦もまた，民族と権力とジェンダーの交錯したなかで重層的に抑圧され続けてきたうえに，彼女たちの戦争被害に対する補償も謝罪もいまだになされていない[57]。戦争は，より弱い立場の人間に抑圧と苦しみが重積するような仕組を作り出している。日本軍の部隊には日本名に改名させられた朝鮮人志願兵がいたことも看過されてはならない。第 49 師団の吉田部隊は，朝鮮で編成された部隊で，全体の 20 %が朝鮮人志願兵であった[58]。自主的に志願したとも言い切れない彼らは，戦場では「日本兵」として戦闘したにもかかわらず，生

（54） 主力第 56 師団以外では，第 53 師団（安）第 119 連隊・第 53 連隊，第 18 師団（菊）第 114 連隊，第 15 師団（祭）第 67 連隊，第 2 師団（勇）第 29 連隊・工兵第 2 連隊・第 16 連隊，第 49 師団（狼）第 168 連隊などが投入された。

（55） 抽出部隊による拉孟守備隊救出作戦については別稿で明らかにする。

（56） 龍陵の白塔村の「維持会」の漢奸による手引きで，600 名の「華姑嬢（ファクーニャン）」と呼ばれた現地女性が「慰安所」へ供出された（山田正行『アイデンティティと戦争』グリーンピース出版会，2002 年，123 頁）。

（57） 2000 年 12 月 12 日，日本で開かれた女性国際戦犯法廷で，昭和天皇に「有罪」判決が出されたが，日本政府から慰安婦らへの謝罪と補償はない。詳細は西野前掲書，211–215 頁を参照されたい。

（58） 第 49 師団第 168 歩兵連隊（吉田部隊）は，1944 年 8 月 20 日に第 33 軍下に転属され，雲南戦線の龍陵の攻防戦に第 2 師団（勇師団）と共に投入された。

還しても戦後の補償もなく黙殺されたままであるというのが現状である。[59]

以上の内容を踏まえて，拉孟全滅戦の兵士の実像をどのように捉えるべきであろうか。兵士らの実像を，公刊戦史のように「勇戦敢闘」という一側面を強調するような捉え方では不十分である。一兵卒の兵士にも，中国住民の日常を破壊し，侵略した「加害者」としての側面と同時に，全滅戦を強いられた「犠牲者」としての側面が共存している。日本兵の加害者としての側面は，日本軍の記録文書の多くが残されていないため，中国史料や聞き取りに依拠しており，近年中国の戦争被害の実態が明らかにされつつある。中でも性奴隷として供出された現地女性らは日本軍のみならず中国側の傀儡権力によって重層的に抑圧された「犠牲者」であったことは既に述べた通りである。また，個人的に中国住民に対して加害行為を行っていなくても，拉孟守備隊が連隊として関わった占領支配体制下での侵略行為については一兵卒であっても責務の一端は免れないだろう。さらに，守兵らは慰安婦に対しては「加害者」である反面，全滅戦では同じ「犠牲者」であった。

このように，兵士らは戦争の「加害者」であると同時に全滅戦の「犠牲者」でもある。「玉砕」を求める軍上層部の至上命令が死闘以外の選択肢を奪い，投降捕虜を絶対に許さない日本軍独自の体質が，重病傷者や飢えなどによる衰弱者の自決を促す結果となった。「玉砕」は，命令なく脱出して帰隊した者があってはならない。軍上層部は全滅戦からの帰還兵を意図的に危険な戦闘に投入し，死に場所を与えてやる「配慮」を行っている。[60] 戦後，捕虜となって生還した兵士は，村の名誉を汚したとして非難と冷遇に晒され，ついには発狂者や逃亡者を出した例もある。[61] これは，『戦陣訓』の中の「生きて虜囚の辱を受けず，死して罪過の汚名を残すこと勿れ」という日本独自の捕虜に対する見解が，軍隊だけでなく村落まで浸透していたことを意味する。たとえ生還を喜ばれた将兵であっても，戦友の大半を失った全滅戦の生き残りという重い現実は，生涯心の重荷になって消え去ることはない。以上のように兵士を多面的かつ複眼的に捉え直すことで，拉孟全滅戦の兵士の実像により近づくことが可能となるだろう。そのためには，戦闘体験者の聞き取りを基にした個別のミクロ的な実証研究の積み重ねが最も重要であり，その結果，兵士の「加害者」と「犠牲者」としてのアンビバレントな二面性が明らかになる。

最後に，拉孟守備隊全滅戦の史実を実証的に解明する作業から，日本における今後の軍事史研究の研究方法について言及しておきたい。まず，日本では「公刊戦史」が必ずしも歴史的事実を提示しているわけではないという「事実」を直視しなくてはならない。つまり，日本には一次史料による実証的研究に基づいた「公刊戦史」がいまだ存在していないのである。これは軍上層部あるいは

---

(59) 第 49 師団（狼兵団）の朝鮮人志願兵が書いたビルマ・雲南戦記として，李佳炯著『怒りの河ービルマ戦線狼山砲第二大隊朝鮮人学徒志願兵の記録』（連合出版，1995 年）がある。李佳炯は，創氏改名され，「岩本佳夫」という日本名で 1944 年 1 月 20 日に入隊（25 頁）。

(60) 太田前掲書，305 頁。

(61) 同上書，300 頁。

旧防衛庁幹部にとって不利益になる史料，戦争犯罪的な行為を想起させうる公文書史料が結果的に管理，保存されてこなかったという経緯と，多くの一次史料が失われ，存在していても利用できないという日本の史料の未公開性とに起因している。[62] それゆえ，事実を解明するためには，戦争体験者のオーラル・ヒストリー（聞き取り）が必要不可欠の重要な研究方法になる。ただし，オーラル・エヴィデンスを利用する際にも，文書史料と同様の慎重な史料批判が必要であること言うまでもない。オーラル・ヒストリーでは，話し手が「英霊」となった戦友の死を美化したり，誇張したり，または話し手が事実を証言できない状況に陥ることがあることも想定しなくてはならないだろう。例えば，筆者は，拉孟全滅戦の聞き取り調査の過程で，戦友会や慰霊祭などでは，いまだに60数年前の軍隊の階級が暗黙の権力を行使して，部下は上官の前では本心が言えないという場面や上官は職務上，事実を語りづらいという場面に直面した。このような時は，場所や日時を改めて，辛抱強くある程度の期間をかけて聞き取りを複数回試みるのである。このように入手したオーラル・エヴィデンスを可能な限り文書史料や複数の証言とクロスさせることで，一次史料としての正当性を突き詰めることが可能となるのである。日本の公文書事情を克服する意味でも，日本の内外を問わずに文書史料とオーラル・エヴィデンスを地道に収集する作業の積み重ねが軍事史に限らず総じて日本の現代史研究には必要不可欠であろう。戦争体験者が高齢化し，最後の聞き取りの瀬戸際の時機の今，日本現代史家にかかわらず，歴史家の専門分野の枠を超えて，歴史家の使命として，戦争体験者のオーラル・ヒストリーを全国的な規模で早急に精力的に展開すべきである。このような実証的方法による事実の解明の蓄積以外に，日本における軍事史研究の進展と，日中韓の歴史的事実の共有化に貢献できる道はないであろう。

（神田外語大学非常勤講師）

（62） 日本の公文書管理の杜撰さの例では，血液製剤によるC型肝炎患者418名の情報ファイルが「ハイキ」と書かれたダンボール箱から発見されたことが記憶に新しい。近年，福田元首相の提言で公文書管理強化の動きがようやく始まった。